

異文化間コミュニケーション研究の解釈的アプローチ

井上逸兵

1. はじめに

いわゆる異文化間コミュニケーション研究は、語用論、社会言語学、その他言語学系統の研究とは有機的な結びつきを必ずしも持ってこなかった。言語学者にとって異文化間のコミュニケーションはせいぜい周辺的な問題であり、異文化間コミュニケーション論者にとって言語の問題はごく限定的な問題であった。その背後には言語学の「自律性」と異文化間コミュニケーション研究の「実践性」という前提あるいは志向の相違があると考えられる。

本論では語用論、社会言語学的な知見に基づきながら、実践的に異文化間のコミュニケーションを分析することを通して、その実践性ゆえに顕在化させうる言語とコミュニケーションの諸相のいくつかを論じたい。特に会話の参与者の解釈を出発点とした、言語学系統の諸分野の取り組みとはかなり異なったアプローチを通して、「自律的」な言語学では扱えなかった言語使用あるいはコミュニケーションにおける象徴的価値、象徴的な解釈のプロセス、身体的ともよびうるような共調関係などを取り上げてみよう。これらの事象が本論で言うところの「解釈的アプローチ」によって明示的、かつ実践的に有効な形で取り扱うことができることを主張してみたい。

言語とコミュニケーションの諸相のうち、「異文化間コミュニケーション」の観点から論じうる語用論、社会言語学的なことがらは、結局のところ「実践性」の副産物であるかのようにも見える。しかしながら、その副産物は語用論、社会言語学を考える上でも意味のある副産物であると考えたい。言語学者には不毛と映るかもしれない「実践性」を前提とした議論が、多少なりとも言語学にとって意味のあるものとなり、言語を中心とした分析が「異文化間コミュニケーション論」にいささかの貢献ができればと願う。本論はそのようなより包括的、統合的なアプローチの提案であり、試論である。

本論で提案したいと考えているプログラムは、解釈というレベルを手がかりに、様々な言語的非言語的要素やコミュニケーション行動に関わる「文化」的な前提や慣習を考えようというものである。これは基本的に John J. Gumperz の解釈的アプロー

チ (Interpretive Approach) にそのアイディアの源がある (Gumperz, 1982)。単純に言えば、解釈すること、特に様々な不快感、不可解感を議論の俎上にのせ、そこからその当該のコミュニケーション行動において何が起こっているかをみようというものである。そして本論においては、解釈や推論のプロセス、ポライトネスの諸現象、コミュニケーションにおける適切性なども含めた、さらに包括的な「解釈的アプローチ」を提案してみたい。それによって顕在化するところの、コミュニケーションの語用論的、社会言語学的側面のいくつかを例示し、また同時にそのような議論を通して「解釈的アプローチ」の意義を考えながら、言語と意味と解釈とに関わる言語学的な前提の逆転を論じてみたい。

2. 異文化間コミュニケーション研究と言語研究

「異文化間コミュニケーション論」¹という分野が、この名のもとに研究されるようになったのはそれほど古いことではない。20世紀における世界とアメリカ合衆国がこの分野の背景にあったにちがいない。しかしながら、「異文化」という視点や異なったものとの比較対照は明示的・非明示的に以前からあったことは言うまでもないであろう。また、このような研究分野の有無にかかわらず、人は古くから「異なった」人たちと接してきた。

異文化間コミュニケーション論なる学問が本当に存在しうるのか、という問いもきわめて妥当なものとして、ある。研究対象としてのフィールドではありうるが、学問分野としては存在しえない、との主張にもそれなりの道理がある。そのじつ、おおざっぱに言って、この分野でのこれまでの成果の多くは(社会)心理学やTESOLなど第二言語習得(学習)などの枠組みの中にあるように見える。アメリカではすでに学部、学科等としても確立している「コミュニケーション学」が基盤としてあるという日本との違いがそのように思わせる理由の一つでもあろう。

異文化間コミュニケーション論として論じられている主なトピックには、個人、組織、集団などにおけるコミュニケーションのタイプが「異文化」と関わる諸問題、ステレオタイプと偏見、価値観、カルチャーショック、などがある。それらの中には「異文化」であることを抜きにして論じうるものもあることからわかるように、この研究群に一貫してみられるもの、「異文化間コミュニケーション論」をその名において存立せしめているものがあるとすれば、それは「実践性」に他ならない。いかなるアプローチであろうとも、そこには「よりよい相互理解のために」という共通の目的がある。異文化間コミュニケーション教育、トレーニングに関する議論がさかんにあるの

もそういう理由からだろう。Prosser(1978)も言うように、「かりにすべての文化特質が世界中どこでも全く同一であるうようになれば、異文化間コミュニケーションを研究・実践すべしとする考え方は不要に」なるのである。

実践志向であるがために「文化の異なる人たちのコミュニケーション」はすでに与えられた課題とされていた。「異文化」が「異文化」であることの議論は必ずしも十分になされていないように見える（「異文化間コミュニケーション」における「異文化」性が自明のものでないことは、例えば西阪（1997）のようにエスノメソドロジ的な観点から論ずることも可能であろう）。異文化間のコミュニケーションは我々にとって（この分野の始まりにおいては、アメリカにとって）そもそも困難な問題を伴っているものであり、それは解決されねばならないものである、ということがまず現実的、経験的によってたつ前提であった。一方、コミュニケーションの参加者の何らかの異なりは、言語学から見ればそれ自体考察が向けられる対象ではない。また、異なりを「文化」として取り扱うことも言語学が極力排除してきたことであった。しかしその一方で、現代社会に生きる我々は日常のいたるところで「異文化性」に遭遇せざるをえないという現実もある。ここで文化人類学その他にある「文化」の諸定義を持ち出すつもりはない。ただ本論でも異文化間コミュニケーションにおける「文化」のありうる取り上げ方の一つを示すことにはなるう。

言語研究と異文化間コミュニケーション研究に接点が生まれなかった要因として他に Hall(1959,1966)、Birdwhistell(1970)などの近接学(proxemics)、動作学(kinesics)など、いわゆる非言語コミュニケーション研究も挙げることができるだろう。その知見はコミュニケーション学における言語の役割を後景化させることになった。言語外にもコミュニケーションを行っているという認識はコミュニケーション学においては重要かつ基本的な認識とされるようになった。Watzlawick(1967)が「我々はコミュニケーションしないことはできない (We cannot *not* communicate)」という言葉で表したように、我々は非常に多種多様な言語的・非言語的メッセージのやりとりを意識的・無意識的におこなっている。そのようなメッセージのやりとり全体から見れば言語的なメッセージの比重は高く見積もるべきではないとされているのである。

以上のことが、言語学と異文化間コミュニケーション論を含むコミュニケーション学が接点を持たなかった主な理由であろう。言語のみによってはとらえきれないコミュニケーション現象の複雑さと多層性は、言語の内的な組織の問題としても、言語学の延長線上にも捕捉しがたいように見える。一方の異文化間コミュニケーション論の方は十分な考察を言語に向けてこなかった。言語外にも情報を授受しあう事実を強調

するあまり、会話における言語的なコミュニケーションの「文化」の問題にはそれほど議論をさいてこなかった。

言語学的手法や問題意識のうちに解釈の異なりや発話行動の文化的なパターンを取り扱う試みもなされてはいる。「語用論的転移 (pragmatic transfer)」は第二言語 (外国語) 習得等の応用言語学における、異文化間のコミュニケーションに関わりうる議論の代表的なものの一つであろう (Beebe 他(1990)など)。Blum-Kulka 他(1989)や Kasper 他(1993)などの異文化間の言語行為 (speech act) の実現の異なりを比較調査したプロジェクトも同様の試みであろう。しかしながら、その多くはロールプレイなどを通して言語行動を「客観的」に観察するなどの、筆者からみれば過度に禁欲的なまでの言語学的手法であるように見える。それらの仕事にはそれなりの評価を与えるべきではあると思うが、もし「実践的」に異文化間のコミュニケーションを考えるとするならやはり十分ではないといわざるをえないだろう。それらの議論の意図は明確である。ある状況において異なった「文化」の話し手は異なった言語行動をとる、ということをつまやかにし、それによって異文化間のコミュニケーションの(ありうる)問題を指摘しようとするものである。

しかしながら、「実践性」によって立つとき、すべての「異なり」に目を向ける必要はない。たとえ異文化間のコミュニケーションにおいてであっても我々には許容できる「異なり」や局所的に対処できる「異なり」もある。コミュニケーションには様々な要素が複雑かつ複合的に関与しているために、比較対照のみによっては異なるものの間の接触において何が起こるかを予知することはできないのである。たしかに、異文化間コミュニケーションにおける「不幸」の原因の多くは話者間の何らかの「異なり」である。この認識は間違いなく重要である。しかし、繰り返すが、いくら発話や解釈のパターンが違っていても、不快感や不可解感、つまり、「幸せ」でない心の動きがなければ、あるいは後になってから判明することもありうる誤解やミスコミュニケーションがなければ、「何もなかった」に等しいことのはずである。「実践的に」考えるならば、「不幸」から考えることがよい方法だろう。

「実践性」と言語学系統の研究はかくも両立しえないものなのか。言語学的手法に忠実であるほど、実践性、実際の異文化接触からは遠ざかり、実践性、異文化性を論じるほど言語学的な関心からは遠ざかってしまう。異文化間コミュニケーション研究をこの分野として存立せしめているものはその「実践性」であることについては繰り返しふれた。しかし、筆者はいわゆる異文化間のコミュニケーションを見るときに、語用論や社会言語学の知見が道具立てとして有効であると考えたいと同時に、逆にそ

れを見ることが語用論や（社会）言語学の持つ言語観やコミュニケーション観に少しは変革をもたらせはしないか、少なくとも言語やコミュニケーションの従来とは少し違った見方を与えてはくれないかという期待をもっている（井上、1999a, 1999b）。本論は方法論的な問題を論じているようでもあるが、この問題はたんなる手続の問題ではない。たんに語用論、社会言語学的知見を実践に生かそうという提案をしているのではない。この視点に立つことで、少なくとも副次的に、しかし非常に有意義な形で言語とコミュニケーションの重要な一面を見ることができると主張したいのである。それは言語と意味と解釈とに関わる、いわば「言語学的アプローチ」の逆転を論じることでもある。

3. 解釈的アプローチ

3.1. Gumperz の枠組み

以上のように見れば、異文化間コミュニケーション論と言語研究の議論の方向違いは明白であろう。そのような状況にあつて Gumperz のアプローチはその二つを交差させる試みと考えることもできよう。本節ではまず本論の議論の基本となっている Gumperz (1982) における彼の基本的なアイデアを概観してみよう²。

Gumperz のアプローチを言語学の流れの中で特徴づけるとするならば、マクロ的社会言語学とミクロ的社会言語学との融合、あるいは相関的、指標的な社会言語学から相互行為的社会言語学への展開という表現が可能であろう。社会言語学はそもそも言語を自律的な体系とみなす言語学へのアンチテーゼという側面を持っており、彼も例えばソシュールが言うような共時的な静態としての言語の捉え方、チョムスキー流の理想化された話者の言語能力という対象の立て方では言語が実際に社会の中でいかに用いられているかは捕捉しがたいことに言及している。しかし、社会における言語といっても、彼はある種の言語的な特徴と様々な社会集団や状況などとのたんなる相関の次元を超えてより精密な言語行動の説明原理を見いだそうとしているのである。伝統的な言語学で取り上げられてきた文法的な要素、従来の社会言語学でも指摘されてきた言語的変種、慣用的な表現、イントネーションやピッチ、声の大きさ、韻律 (prosody) のパターンなどのパラ言語的な要素、非言語的な要素、さらにはそれらの持つ象徴的な価値が対人的なコミュニケーションにおいてどのように推論や解釈のプロセスに関わっているかが彼の中心的な議論である。そのような言語的、非言語的シグナルは解釈の枠組みを喚起し、当該の発話をどう解釈すべきかの手がかりとなる。これは「コンテクスト化の合図 (contextualization cues)」と呼ばれるもので、彼の

アプローチの根幹をなす概念である。会話の参加者がどのような発話行動に携わっているかを示すその合図は、発話活動の種類や性質を示すシグナルとなり、発話を解釈する際の枠組みを与える。文法的語彙的知識は解釈のプロセスのいくつかの要因の一つにすぎないのである。

コンテキストとは簡潔に言えば、解釈の枠組みを得るために参照する情報の集合といったようなものであるが、それは一般に所与のもの、あるいは定的なものと考えられてきたように思われる。しかし、Gumperz はコンテキストとは会話の参加者が会話の中で相互行為的に作りだし、また引き出してくるという側面に着目した。会話のプロセスは物理的な状況、対話者の背景的知識あるいはそれらの状況との関係から推論される想定に始まり、その想定は当該の解釈の枠組みにおいて会話の内容と上に挙げたような言語的、非言語的な信号にシグナルされた情報を知覚することで常に修正されていく。会話の相互行為のプロセスにおいては様々なコンテキスト化の合図を手がかりとして、それと慣習的に共起するものへの予期 (co-occurrence expectation) に基づいて、参加者はどのような活動がそこで起こっているのか、自分に何が期待されているかなどについてつねに推論をしていく必要があるのである。彼の言語学上の意義のひとつはこのように従来の定的なコンテキスト観をよりダイナミックな、相互行為的なものに革新したことにありと見えよう。Gumperz が取り上げるような会話における推論、解釈のプロセスは従来の言語学ではソーシャル流に言えばパロール、チョムスキー流に言えば言語運用といった、どちらかと言えば非本質的なことがらと見なされるものであろう。しかしながら、そのような言語学的には非本質的、周位的とされる要素が彼の枠組みでは逆に中心となるのである。

Gumperz のアプローチの鍵となるのは上述のように言語的、非言語的なコンテキスト化の合図とそれが慣習的に共起するものへの予期であるが、問題となるのはそのような慣習を共有しない対話者間で、同一の合図に対して同一の解釈の枠組みが喚起されない場合である。コミュニケーションにおける解釈や推論に関わる言語的、非言語的な諸特徴は、異民族間、異文化間ではたとえ同一の言語を話し、文法能力が十分であったとしてもしばしば同一の解釈の枠組みを喚起せず、発話は話者の意図とは異なった解釈をうけることになる³。このようなプロセスはしばしば社会的文化的背景の異なる話者間のミスコミュニケーション、誤解、会話における不快感、不可解感という形で会話者の意識にのぼる。しかしそれらの原因となる諸要素は当事者が自覚できるとは限らないほど無意識的で微妙なものもある。ある社会におけるメンバーが境界の明確な単一で均質的な言語あるいは方言を話すという状況は少なくとも現代都市

社会にはすでにない。そのような前提にあっては説明しきれないのが現代都市社会、多民族社会の異民族間、異文化間のミスコミュニケーションなのである。

3.2. 「解釈」から見たコミュニケーションの諸相

本節では「解釈」を出発点として言語、コミュニケーション現象を見ることによつてどのような洞察が得られるかを考えてみよう。これらは言語学的前提からもコミュニケーション学的観点からも問題とされえなかつた事象と思われる。

次のやりとりはある大学院の非公式のセミナーが終了した直後、教室を出ようとしている教師と院生の会話である (Gumperz, 1982)。この教師 (B) は白人であり、院生 (A) は黒人である。この二人の他に周囲には白人、黒人の院生が数人いる。

A1: Could I talk to you for a minute? I'm gonna apply for a fellowship and I was wondering if I could get a recommendation?

B1: O. K. Come along to the office and tell me what you want to do.

A2: *Ahma git me a gig!* (おおよその意味: I'm going to get myself some support)

ここで黒人の院生 A が A2の発話で、黒人特有の言い回しにスイッチしていることに注目してみよう。言語学的には、この A2の発話はどのように処理されるであろうか。統語論者であれば (たとえば生成文法論者であれば) 言語運用の次元の、すなわち言語学者が考慮するに値しない問題とするであろう。語用論者にとってもこのようなコードスイッチが推論や理解に与える影響は少なくとも中心的な問題ではないであろう。社会言語学者であれば標準的な英語の "I'm going to" に対する黒人特有の "Ahma"、同じく "get" に対する "git" という変異形に関心を持つかもしれない。

しかしながら、このような社会的、民族的な話者の属性と言語的な変異形との相関だけでは、実際にそこで何がコミュニケーションされているかについて我々はほとんど何も知りえない。Gumperz は発話者がどのような意図を持ち、会話の参加者がどのような解釈を行っているかを明らかにするために、このやりとりを録音したものを一群の人たちに再生して聞かせた。そこにはこのやりとりに実際に加わっていた人たちも含まれている。そして彼らは話し手が何を意図していたか、この A2の言語上のストラテジーにどのような程度の効果があったかを問われるのである。

様々な解釈がなされる。が、決してそれはランダムではなく、インフォーマントたちの民族的な背景や過去の黒人との接触の経験の度合いとの関係を示唆するものもあ

る。このケースにおいては、大ざっぱに言って次の四つの解釈者のグループ分けが可能であった。まず(1)黒人とほとんど接触をもったことのない人たちの中には全くこのスイッチを理解できないか、あるいはうっかり方言にスイッチしてしまった、という以上の解釈をしない人たちがいる。また(2)白人の教師や(白人が支配的な)アカデミアの拒否を含意しているのだ、という解釈をする人たちもいる。さらに、(3)この発話は他の黒人の院生にのみ話しかけるという意図をもったものなのだ、つまり聞き手の特定化を意図しているという解釈をするものたちもいる。しかし、(4)黒人と黒人のサークルで長い時間を費やしたことがある白人とからなる一群の人たちは全くこれらとは異なった解釈を施した。すなわち、A2によって A は「この白人の社会でうまくやっているぞ、流されていないぞ、ゲームをやっているんだ ("I'm still in control, I'm just playing the game as we blacks must do if we are to get along in a white dominated world" (Gumperz 1982, 31-32))」といわんばかりに自らを正当化し、他の人間にアピールしているのだという。

言語的なシグナル、形式的な変異形の知覚にもとづいた意図の解釈はこのように多様である。(1)の解釈をした一群の人たちは、A1、B1に対して A2は前者とつながりをもった全体を構成する部分とすら解釈しなかった。それに対して(2)から(4)の人たちはこれを結束関係のある全体として解釈している。しかしその結束関係は接続詞や直示的な表現によってもたらされているわけではない。このことによって我々は結束関係や話題の一貫性はテキストそのものに存在するのではないことに気づかされる。聞き手は様々なシグナルを通して、何らかの関係を見いだそうとするのである。

このような解釈を手がかりとして考えようとする試みは一見何の変哲もないやり方のように思われるかもしれない。しかしこのアプローチはことばとコミュニケーション、特に異文化間のコミュニケーションの特質を实によく考慮したものと言えるように思われる。言語学的なコミュニケーションのモデルでは、ことばの解釈の多様性は少なくともこのような形で問われることはまれだろう。しかし異文化間のコミュニケーションにおいては、同じ言語を話す人同士であっても様々な文化的背景が異なると、同じシグナルを異なったふうに解釈したり、あるコンテクスト化の合図から話し手が意図する解釈の枠組みを想起できなかつたりするのである。話し手の意図を読みとることが正しい解釈だとするなら、異文化間のコミュニケーションではその正しい解釈が得られる可能性は常に高いとは限らない。いや、極論すれば、むしろ「正しい」解釈を問うこと自体が無意味なのかもしれないのである。

そのような不確定さの中で会話者たちはこの意図と解釈の交渉をしあっていくしか

ない。現実の異文化間のコミュニケーションを考える時には、「正しい」解釈がなされず、そのような交渉はしばしばうまく行かないという事実こそが重要なのであり、考察すべきと考えられよう。言語的な特徴、韻律的な特徴、非言語的な特徴がどのように解釈を生むのか、意図と解釈の交渉がどのようなプロセスでなされているのかを見るのが異文化間のコミュニケーションに対する多くの洞察を我々に与えてくれるはずである。また、多数のインフォーマントからのデータによって、ある共通の文化的背景をもった人たちの共通の解釈のパターンが示されることもある。本論のアプローチにおいてはこのような形で「異文化」が顕在化すると考えたい。コミュニケーションにおける「異文化」とは民族性や国家などの言語とは独立した変数とは切り離された、コミュニケーション上の慣習の集合によって（少なくともある程度は）類型化されるところのものであると考えられよう。むしろ、それは明確な境界線をもったカテゴリーとしては現れることのないものである。

もう一つこのアプローチが示唆することは、言語的な意味と解釈は異なった次元のことがらであるということである。解釈は常に複数のレベルのコンテクスト化の合図を通して伝えられる情報によっている。聞き手による話し手の意図の解釈は不安定なものだ。話し手が意図したとおりに聞き手が解釈する保証はない。我々は言語によって伝えられているレベルの理解だけでなく、またグライス流の会話の含意だけでもなく、様々なレベルで我々は解釈や推論を行っているのである。そしていかにしてその解釈が達成されているかを見ることによって、そのプロセスにおける様々な要素を明らかにすることができる。

これは言語学の議論における意味と解釈の取り扱いとは全く異なっている。言語学においては、言語を明示的に自律的な体系とみなすにしろ、一般的な認知や経験などを説明原理にするにしろ、「意味」は言語との関わりにおいてのみ問題にされていると思われる。意味と解釈の齟齬はあまり問題にされることはない。相互行為的に意味を解釈する会話の参加者はそこにはいない。語用論におけるいわゆる言外の意味や推論のプロセスに関わる議論について言えば、(チョムスキーのように明示的ではないにしろ)「理想的な」会話者(推論する人)が前提されているように見える。そこには「様々な」話者はいない。話者の「様々な」側面には目を向けられることもない。均質的な推論をする人たちの集団が前提され、「様々な」集団の存在は少なくとも二の次とされる。対人的な配慮を律する原理もその普遍性が主に求められ、様々な実現される「運用」のレベルの議論もいまだ十分とはいえない。解釈を生み出す要因となるパラ言語などの非言語的な要素も十分に考察の対象にはなっていない。話し手

の属する集団ごとの解釈の異なったパターンや不快に思ったり不可解に思ったりするという「心」の動きも、多くの場合捨象されてきた。

本論のプログラムにおいては、端的に言えば、言語との関わりによって意味や解釈を論じるのではなく、まず会話の参加者が「感じ」、「解釈する」ということを出発点として考える。「実践的」に異文化間のコミュニケーションを考えるならば、これが当然とすべき方向であることは先に述べた。しかし、それはたんに実践的であるばかりでなく、語用論、社会言語学的な問題を考える上でも、いわば「言語学的言語観」からは生み出しえない洞察を与えてくれるように思う。不快であったり、不可解であったりする事象はしばしば極めて特徴的な、そこに関わる参加者のコミュニケーションの様々な次元の慣習を示すことがしばしばあるからである。

例えば、関西の（大ざっぱではあるが）イントネーションでの「あほやなあ」という言葉が関東人（これまた大ざっぱではあるが）その他に不快感をもたらすという事例がよくある。しかし、より詳しく当事者および同様の背景を持った人たちの解釈を吟味すると、関東人には「小ばかにされたような」このことばは、しばしば関西人にとってはばかにしながらも「親しみと愛情を込めた」象徴的な意味を持っていることがわかる。当該の愚行を許してやる、という含意すらあるというインフォーマントもいる。このような象徴的な価値は言語学、語用論的な観点からは説明することは困難であろう。また関西人が、店員やタクシーの運転手などに対して発する「ありがとう」は関東人にとって無礼な印象を与えることがあるが、それは「ありがとうございます」よりも親しみのこもった、むしろ「丁寧な」振る舞いであるという。このような関東人の印象、解釈は関西人との対照をなすばかりでなく、関西人に特徴的なコミュニケーションのスタイルや慣習を示していると考えられる。

また、福岡県地方出身のあるインフォーマントは東京方言とのリズム、あるいは拍数との違いに容易に描写しがたい違和感をおぼえるという。

- a. A : あれ、これどう操作するんだっけ。
B : だからあ、さっき言ったでしょお。
- b. A : あれ、これどうやって操作するんやっただっけ。
B : だけえ、さっき言ったやろお。

このインフォーマントにとって「だからあ」と「だけえ」の拍数の違いは自分の方言と東京方言の全体的なリズムの違いを象徴しているように感じられ、東京方言による

会話に違和感をおぼえるという。会話の共調性 (conversational synchrony) を得にくいということかもしれない。むしろこれは福岡県出身者すべてに当てはまるわけではないだろう。会話に対する共調や不快感の要因は非常に複合的である。

しかし、「文化」性をとりあえず抜きにして考えてみれば、一般化できるか否かはここでは問題ではない。このような違和感や不快感を手がかりとすることは、コミュニケーションにおける様々な要素の象徴的機能や身体的ともいえるような共感関係を見やすくさせるのである。ここでとりあげたようなことからは言語学にとっておそらく非本質的な問題であろう。情報や意図の伝達が言語によるコミュニケーションの主たる目的と考えられやすい。しかしこのような観点から見ると、まさにこのような一見非本質的と思われるパロールや運用のレベルに人間のコミュニケーションの本質的な部分が潜んでいる可能性を感じずにはいられない。我々は時に必ずしも合理的ではなく、感覚的、身体的に生きている存在でもある。解釈的アプローチは方法論、議論の手順としての変革を迫るばかりでなく、意味と解釈、中心と周縁、言語と非言語、実質 (内容) と形式、ラングや言語能力とパロールや言語運用などの関係の逆転をも意味するのである。

3.3. より包括的なアプローチへ

Gumperz はコンテキスト化の合図という概念によって従来のコンテキスト観を革新し、言語的非言語的要素がどのように会話のやりとりとそこにおける解釈に関わってくるかを知る視点を我々に与えた。我々の社会におけるメンバーシップが複合的、多層的に会話の営みに現れ、意識的無意識的に、時に象徴的に、そして相互行為的に様々なメッセージが解釈され、交渉されることを示すことでスタティックな (社会) 言語学の限界を乗り越えて、いわゆる相互行為的社会言語学の道を開いた。様々な言語的非言語的な要素、さらにはそれらの持つ象徴的な価値が対人的なコミュニケーションにおいていかに推論や解釈のプロセスに関わっているかを示した。

しかし、会話における不快感や不可解感はそのような言語コミュニケーションの微視的な要素による解釈の枠組みの想起およびその慣習やそれらによる象徴的な価値にとどまらない。ポライトネスにかかわる「文化」的なパターンや Grice の協調の原理とその格率を実現される際の「文化」的なパターン (Leech のことばであれば sociopragmatics ということになる) (Leech, 1983)、言語行為の構成の文化的側面 (人類学者中川敏の唱える言語システム論は興味深い。彼の言うところの記述のレベルの「文化」的適切性は本論の議論に関わるところがあろう。(中川、1992))、コミ

コミュニケーションの民族誌 (ethnography of communication) の見地から見たコミュニケーション行動の適切性など、さらにいくつかの次元でのコミュニケーションの「文化」的な側面がコミュニケーション上の問題を生みだしている。

例えば、前節で取り上げたような関西地方と関東地方の人たちのコミュニケーション上の慣習は、イントネーションや韻律的な特徴との結びつきで知覚されやすいが、ポライトネスに関わる要因のあることを見るのは容易である。少なくとも前節の事例で見られる関西地方の人たちに見られるコミュニケーション上の方策は、Brown と Levinson (1978, 87) のいうところのポジティブな面目により配慮した、すなわち連帯的な方策であると言えるであろう。表面的には相手の非難ともとられうる「あほやなあ」という言語行為が相手に対して親密さや愛情を表すとするならば、この場合の形式上の非難は対立を生み出さない、むしろ連帯的な関係を含意し、また維持するということであり、「ありがとうございました」という形式的に丁寧さが保証されている言語行為がむしろ距離をつくりだすがために、関西イントネーションでの「ありがとう」がより好まれるとするならば、それはまず第一に、親しみを表すことがよりポライトであるというコミュニケーション行動全般にわたる前提を表していると考えられるかもしれない。

ポライトネスに関わる不快感の多くは、Brown と Levinson の枠組みで言えば、ポジティブ (連帯的) な丁寧さとネガティブ (独立的) な丁寧さが衝突した時に起こりやすい。たとえば、Brown と Levinson のいう面目 (face) に関わるリスクの算定の食い違いは、たんなるストラテジーの差に現れるだけでなく、会話の参加者の力関係 (power) の次元で認識される傾向があることを Garcia (1989) や Scollon と Scollon (1995) などは示している。

また、取り上げる話題の適切さ、会話の中で何に言及するかについての適切さに関しても異文化間のコミュニケーションにおける不快感、不可解感につながる例が多くある。東アジアで見られる「ごはん食べた?」、日本などで見られる「お出かけですか?」などの社交的な (あるいは交話的 (phatic) な) 問いが、場面と対人関係に対して不適切と感じる人たちを他の地域の慣習を持った人たちの中に見つけるのは容易である。

また Scollon と Scollon (1995) が東洋と西洋の違いと指摘する演繹的/帰納的ディスコースパターンの違い (理由を先に述べてから主張するか、まず主張を述べてその後理由を言うか、など) も彼らが指摘するような様々な誤解を生むであろう。

このようなことはもちろん比較や「異文化」の人たちによる不快感や不可解感を待

たずに論じられることであるが、そのような解釈を通すことによって Gumperz における議論と同様により際だった形で、しかも実際の問題解決、問題理解の手だてとして我々は認識することができるのである。

ここで問題とされるものは言語使用、コミュニケーションにおける文化的前提というような言語学ではふれられない問題にも関わっているだろう。そしてこれは同時にいわゆる異文化間コミュニケーション論においても十分に考察されてこなかった問題でもあるように思われる。実践的にことばを用いて異文化とコミュニケーションするものにとって、いずれも有益な手引きとはならなかったのである。本論でのプログラムはより包括的、かつミクロ的な異文化間のコミュニケーションへの手引きを目指すものなのである。

4. おわりに

このようなアプローチによって言語を自律的体系と考える、いわば「言語学的手法」では見えないことを多く見ることができよう。言語に関心のあるものにとって「感じてはいたが、扱えなかった」多くのことを扱うことになる。方法論的により精緻に妥当なものにする余地を多く残していることは言うまでもないが¹、言語と意味とを超えて、解釈のレベルを論じ、そこから言語やコミュニケーションを見ることによって、言語学的にもコミュニケーション学的にも得られないような洞察が与えられるように思う。少なくとも、これまで非本質的としてきたところに本質的と考えるような要素が含まれている可能性は示唆できたのではないだろうか。

20世紀において言語科学、コミュニケーション科学が科学として存在する基盤は確かに築かれたかもしれない。しかしながら、同時にそうすることによって人間のコミュニケーション、人間の生活において言語が果たす役割のある部分を見えにくくしてはいないだろうか。本稿はおそらくこの次の段階の「科学」への流れの中にあると思われる。

註

*本稿は日本語用論学会第2回大会（1999年12月4日、於立命館大学）シンポジウム『語用論のダイナミズム—21世紀への知の探求』における同じタイトルの口頭発表に基づき、それに加筆修正したものである。

¹ Samovar, Porter & Jain (1981)、石井他(1987)、西田編(2000)などによってアメリ

カの異文化間コミュニケーション論の概観を得ることができる。なお、本論で「異文化間コミュニケーション論」という語を用いる時、以下に述べるような主にアメリカなどでコミュニケーション学の枠組みで論じられている類の「異文化間コミュニケーション」研究を指すことにする。また、"intercultural communication (あるいは場合によっては、cross-cultural communication)" に対する訳語として、「異文化間コミュニケーション」という表現と「異文化コミュニケーション」という表現がそれぞれに理由を持って共存しているが、本論の趣旨にとってこの区別はあまり重要ではない。「異文化間コミュニケーション」という語を用いるが、本論が関わるところではこれに積極的な理由はない。

² この節における Gumperz のプログラムに関する記述は、唐須教光編(2000)『英語学文献解題・言語学Ⅱ』(研究社出版)の Gumperz (1982)の項目での筆者による解題に基づいている。

³ Gumperz の議論においては、「異文化性」は主に民族性 (ethnicity) として議論されているが、その意味するところは必ずしも明確に論じられてはいない。

⁴ 宇佐美(1999)にこれに類する方法論に関する議論がある。

引用文献

- Beebe, L., T. Takahashi and R. Uliss-Weltz, 1990. "Pragmatic transfer in ESL refusals." In R. Scarcella, E. Andersen, and S. Krashen (eds.) *Developing Communicative Competence in a Second Language*. Newbury House.
- Birdwhistell, Ray L. 1970. *Kinesics and Context*. University of Pennsylvania Press.
- Blum-Kulka, Shoshana, Juliane House & Gabriele Kasper (eds.) 1989. *Cross-Cultural Pragmatics: Requests and Apologies*. Ablex.
- Brown, Penelope & Stephen C. Levinson, 1978. Universals in language usage: politeness phenomena. In E. Goody, ed. *Questions and Politeness*. Cambridge University Press.
- . 1987. *Politeness: Some Universals in Language Use*. Cambridge University Press.
- Garcia, Carmen. 1989. "Apologizing in English: Politeness strategies used by native and non-native speakers." *Multilingua*, 8 (1): 3-20.
- Gumperz, John J. 1982. *Discourse Strategies*. Cambridge University Press.
- Hall, Edward T. 1959. *The Silent Language*. Doubleday.

- . 1966. *The Hidden Dimension*. Doubleday.
- 井上逸兵 1999a. 『伝わるしくみと異文化間コミュニケーション』南雲堂
- . 1999b. "The Interpretive Approach Revisited: Toward an Integrated Framework of Interactional Sociolinguistics and Intercultural Communication," *Colloquia*, 20:25-39.
- 石井敏、岡部朗一、久米昭元（古田暁監修） 1987. 『異文化コミュニケーション』有斐閣選書
- Kasper, Gabriele & Shoshana Blum-Kulka (eds.) 1993. *Interlanguage Pragmatics*. Oxford University Press.
- Leech, G. 1983. *Principles of Pragmatics*. Longman. 池上嘉彦・河上誓作訳『語用論』紀伊国屋書店
- 中川 敏 1992. 『異文化の語り方—あるいは猫好きのための人類学入門』世界思想社
- 西阪仰 1997. 『相互行為分析という視点—文化と心の社会的記述』金子書房
- 西田ひろ子（編）2000. 『異文化間コミュニケーション論入門』創元社
- Prosser Michael H. 1978. *The Cultural Dialogue: An Introduction to Intercultural Communication*. Houghton Mifflin. 岡部朗一訳『異文化とコミュニケーション』東海大学出版会
- Samovar, Larry A., R. E. Porter & N. C. Jain. 1981. *Understanding Intercultural Communication*. Wadsworth. 西田司訳『異文化間コミュニケーション論入門』聖文社
- Scollon, Ron & Suzanne Wong Scollon. 1995. *Intercultural Communication: A Discourse Approach*. Blackwell.
- 宇佐美まゆみ 1999. 「談話の定量的分析—言語社会心理学的アプローチ」『日本語学』18(11):40-56 (1999年10月号)
- Watzlawick, Paul, Janet B. Bavelas & Don D. Jackson. 1967. *Pragmatics of Human Communication: A Study of Interactional Patterns, Pathologies, and Paradoxes*. W. W. Norton & Company.